

〈研究ノート〉

LPレコード「HIROSHIMA」——ヴィルヘルム・ケンプからの音楽の捧げもの

三 好 史 久

《研究ノート》

LPレコード「HIROSHIMA」

— ヴィルヘルム・ケンプからの音楽の捧げもの —

三好 史久（広島市職員、ひろしま通訳・ガイド協会会員）

ヴィルヘルム・ケンプ（Wilhelm Kempff, 一八九五—一九九二）は広島市中区鞆町の世界平和記念聖堂でパイプオルガン（以下「オルガン」⁽¹⁾という。）を演奏した。その録音はLPレコード化され、「HIROSHIMA」と題して昭和三一（一九五六）年に発売されている。（写真1）しかし、このLPレコードはその後再発売されることもなく、CDの時代になっても「HIROSHIMA」と題したものは未発売で、その存在は広く知られていない。筆者は、地元の新聞で平成二四（二〇一二）年十一月から十二月にかけてこのケンプのレコードにまつわるエピソードを幾つか紹介したが、⁽²⁾ 本稿ではその内容を基に新たに稿を起こし、本市の国際平和と文化交流史の研究に資するものとした。

一 はじめに

ドイツの音楽家、ヨハン・セバスティアン・バッハ（一六八五—一七五〇）の魅力にとりつかれたのは私が中学生の頃。いつの間にか四〇年以上の歳月が経過した。自分では楽器を演奏しないので、もっぱら聴き手として楽しんできたが、七年ほど前、ヒロシマの被爆者に捧げられた一枚のドイツ直輸入盤レコードに中古店で巡り会った。

音楽メディアとして、昨今ではCDやインターネットからのダウンロードが主流となり、「レコード」という言葉自体、死語になりつつあるが、ここでいうレコードとは音声を記録したアナログデータの溝が刻まれたビニール製の円盤のことである。再生は溝に沿って針をトレースさせ、その物理的な動きを電気信号に変換して行う。

さて、このレコードのタイトルは「HIROSHIMA」で、副題は「Orgelkonzert aus der Weltfriedenskirche mit Werken von Johann Sebastian Bach」である。直訳すると「世界平和教会でのヨハン・セバスティアン・バッハ作品オルガン・コンサート」となる。裏には一九五六年七月を表す「7/56」という数字が記されている。

タイトルに都市の名称が使われているバッハのレコードを手にするのは初めてだ。しかも、「HIROSHIMA」である。

ジャケットのサイズは縦二六・七cm×横二六・四cm。黄色の帯上に黒文字でタイトルが印刷され、その下には、こげ茶色の大地、大地の上に横にたなびく雲、雲の上の青空、天を突き刺すような鋭角の図形とオルガンのモチーフを組み合わせた抽象画が描かれている。この鋭角の図形を眺めると、まるで世界平和記念聖堂のオルガンの贈り主であるドイツ・ケルン市にそびえる大聖堂のよ

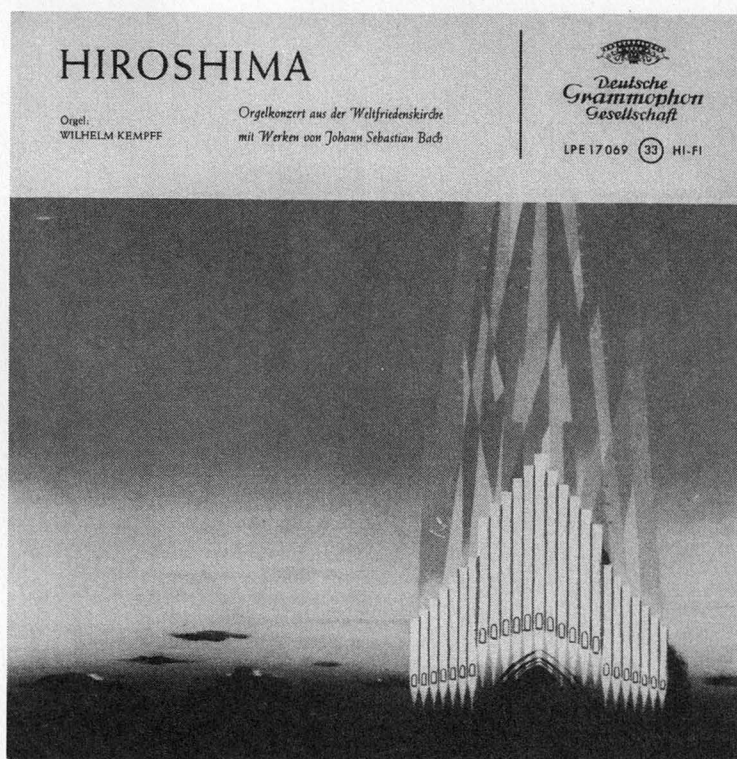


写真1 LPレコード「HIROSHIMA」ジャケット表

註・オルガン演奏はヴィルヘルム・ケンプである。

・ドイツ・グラモフォン社 LPE17069（昭和31年発売）
（Deutsche Grammophon Gesellschaft LPE 17069, 1956）

うである。

二 演奏者ケンプ

ヴィルヘルム・ケンプ(写真2)は、ドイツのピアノリストであり、オルガニストである。明治二八(一八九五)年十一月二五日にユータボク(Jüterbog)で生まれた。四歳で初めてピアノの鍵盤を叩き、⁽³⁾オルガニストの父親の下で教育を受けた。その父がある時、ケンプにベートーベンの曲を弾いて聴かせながら「誰が作ったかわかるかい」と尋ねたところ、幼いケンプは「神様でしょう」と答えたという。ケンプにとつて音楽は始めから神のものであり、神の言葉だったという見解⁽⁴⁾にもうなずける。明治三八(一九〇五)年、九歳からベルリン音楽大学で学び、明治四〇(一九〇七)年十月に最初の演奏会を開いた。その後哲学と音楽史を学んで大学を卒業し、大正五(一九一六)年から演奏家として本格的な活動を始めた。大正十三(一九二四)年にシュトゥットガルト音楽大学の学長に就任したが、五年後、職業演奏家に専念するため退任している。ケンプは演奏活動の一方で、作曲家として活動が続けながら、さらに教育者として多くの有能な生徒に知識と経験を伝授した。

ケンプは二つの世界大戦を経験したが、第二次世界大戦中のナチスとの関係を疑われたため、戦後は



写真2 ヴィルヘルム・ケンプ
©Siegfried Lauterwasser / DG

一時演奏活動を制限され、半ば引退せざるを得ない状態に置かれた。⁽⁵⁾その時期、作曲や自叙伝を執筆する一方で平和の大切さを深く考えたに違いない。彼は音楽を「言語に依存せず、どの国の誰にでも通じる、国境を越えて人々を結びつけるメッセージだ」と捉えていた。

この精神から、広島の世界平和記念聖堂でのオルガン・コンサートのアイデアが生まれたのであった。⁽⁶⁾

ケンプは昭和二九(一九五四)年十一月十四日、オルガン演奏の前日に広島で行われた記者会見で次のように語っている。

忘れもしない昭和二〇(一九四五)年八月のある日、私はドイツで広島がひどい爆弾を浴びたというニュースを聞きました。十八年前(昭和十一(一九三六)年)に広島に来ましたが、あの鳥居や景色は今でもはっきり覚えています。まったく素晴らしい印象として生涯消えないでしょう。小さい無数の島々や建物は立派な芸術です。広島オルガンのことはドイツの新聞で知りましたが、非常に感銘を受けました。十五日にこのオルガンを弾くことができるのを大変うれしく思っています。ドイツでオルガンは「楽器の女王」「平和の女王」とまで言われており、私も元来はオルガン奏者です。全ての芸術家は心の平和と世の現実の平和を望みます。その意味で広島オルガンを是非弾きたいと思っていました。⁽⁷⁾

ケンプは、ドイツのケルン市が広島にオルガンを贈ったことに感銘を受け、痛ましい戦争の犠牲となったまちのために音楽家の自分ができる平和への奉仕として、広島でのオルガン演奏を願っていたのである。⁽⁸⁾

平成三(一九九一)年五月二三日、九五歳で死去するまでの間、広島でこのオルガンを演奏した記録が残るのは昭和二九(一九五四)年十一月十五日と昭和四二(一九六七)年十一月二五日⁽⁹⁾の二度で、レコードは最初の演奏の時の録音である。

三 コンサート会場の世界平和記念聖堂

レコードのジャケットに記載されているオルガン・コンサートの会場をドイツ語から日本語に直訳すると「世界平和教会」となるが、これは中区の「カトリック幟町教会世界平和記念聖堂(写真3)」である。

この聖堂は、昭和二〇(一九四五)年八月六日、広島に投下された世界最初の

原子爆弾の犠牲になられた方々の追憶と慰霊のために、また全ての国の人々の友愛と平和のしるしとして建てられた。

建設に当たっては、この地で被爆したドイツ人主任司祭フーゴ・ラサル神父（日本名・愛宮真備、広島市特別名誉市民、一八九八～一九九〇）を中心とした活動が実を結び、名誉総裁を高松宮宣仁殿下、総裁を吉田茂内閣総理大臣、名誉会長を一萬田尚登日本銀行総裁、会長を池田勇人大蔵大臣とし、各界の



写真3 竣工した世界平和記念聖堂と周辺の市街地
(宗教法人カトリック広島司教区提供)

人々からなる建設後援会が設立され、⁽¹⁰⁾ 民族や宗派を超えて多くの寄付が集まった。⁽¹¹⁾ 寄付金は海外から約六千万円⁽¹²⁾ で国内からは約四千万円⁽¹³⁾ であった。海外の主な寄付者は米国の篤志家（匿名）である。⁽¹⁴⁾ また、建築基金に対する浄財献金のほかに、備品祭具等が世界各地から寄せられたことを忘れてはならない。その内訳は、オルガン（当時四〇〇万円相当、⁽¹⁵⁾ ドイツ・ケルン市から）、四つの平和の鐘（ドイツ・製鋼会社ボフメル・フェライン社から）、大理石本祭壇（ベルギーから）、聖櫃（ドイツ・ボン市から）、地下聖堂の聖櫃（スペインから）、洗礼盤（ドイツ・アーヘン市から）、十字架の道行の壁掛（ドイツ・ミュンスター市から）、青銅製正面扉（ドイツ・デュッセルドルフ市から）、ステンドグラス（欧州及び南米における巡礼の聖地から）等である。聖堂は昭和二五（一九五〇）年の平和記念日（八月六日）に着工。四年後の同日完成・献堂された。この建物は日本的性格と記念建築の荘厳さを備えつつ、新しい時代に適応した宗教建築を実現した建築家村野藤吾（一八九一～一九八四）の設計が評価され、平成十八（二〇〇六）年七月に広島平和記念資料館と共に戦後の建築物として初の国の重要文化財に指定された。ラサル神父の人柄に感動した村野はこの聖堂の設計料の受取りを辞退している。⁽¹⁶⁾

宗教法人カトリック広島司教区では、国・県・市の補助の下、この重要文化財である聖堂を末永く保存するため平成二五（二〇一三）年度から本格的な調査を始めようとしているとのことだ。

四 オルガン

世界平和記念聖堂にオルガンを贈ったケルン市は、広島と同じく戦争で徹底的に破壊された都市である。鍵盤台の右側に銘板（写真4）があり、その中央にケルン市の紋章と広島市を表すサクラの花の模様が描かれ、右側に「ケルンと広島 おなじ苦しみ に 結ばれ つ 世界の平和のため 共に働き 共に祈る」と刻まれている。そして、同じ言葉が、左側にはドイツ語、下側にはラテン語で記されている。

昭和二六（一九五二）年、当時の広島教区長荻原晃神父（一八九六～一九九二）が聖堂建設の協力を呼びかけるために渡欧⁽¹⁷⁾ した際、ケルン市長にオルガン寄贈を打診したところ、翌年ケルン市議会が寄贈を決議し、その当時の日本では貴重なオルガンが世界平和記念聖堂に設置されることになった。ケルン市長は市議会に対する演説で、戦争に対する反省、平和への願い、そして戦争被害に対する同情を強く語りかけたという。

オルガンはボン市内で製作され、昭



写真5 2段の鍵盤台

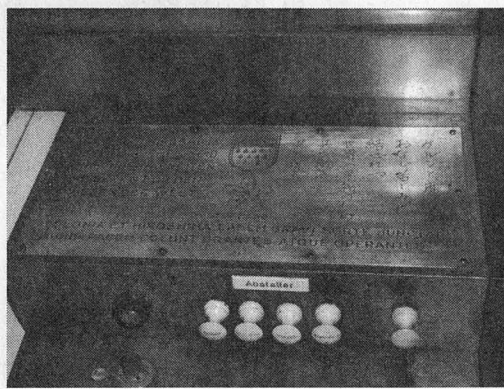


写真4 ケルン市から贈られたオルガンの銘板

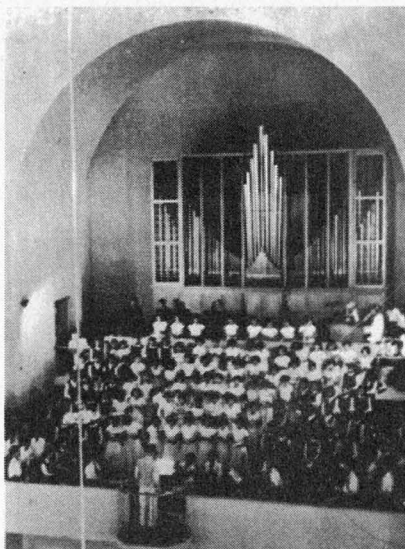


写真6 設置当時のオルガン
(宗教法人カトリック広島司教区提供)

八月六日の献堂式当日には高松宮宣仁殿下、同妃殿下御臨席の下、山上雅庸（一九二二〜二〇〇二）が演奏し、荘厳な音が聖堂に溢れんばかりの人々に披露された。⁽²⁶⁾

山上は、被爆地広島に若人に希望の灯をともしようとしたエルネスト・ゴージェンス神父（一九〇九〜一九七三）の下に集まった有志らと共に、昭和二二（一九四七）年の広島音楽教室（後のエリザベト音楽大学）の創設に関わった人物の一人である。

世界平和記念聖堂のオルガンの柿落としてケンプが演奏したという説⁽²⁷⁾もあるが、ケンプが初めて演奏したのは昭和二九（一九五四）年十一月であった。さて、このオルガ

和二八（一九五三）年二月八日に同市で贈呈式が執り行われた。⁽¹⁸⁾ 贈呈式のことには米国にまで伝わり、『ニューヨーク・タイムズ』の論説は犠牲者の死を無駄にすべきでないという論調であった。⁽²⁰⁾ 昭和二八（一九五三）年六月に完成。⁽²¹⁾ パイプは一、七六七本⁽²²⁾で、鍵盤二段（写真5）、音栓（ストップ）とも呼ばれる音色を切り替えるボタン式のスイッチ二五（別表1「ヨハネス・クライス社製オルガンの構成一覧」参照）を有しており、聖堂二階部分の最後部の壁面に接するように配置された（写真6）新聞に「日本一のパイプオルガン」⁽²³⁾ あるいは「東洋一のパイプオルガン」⁽²⁴⁾ と書かれるほどの最大級のオルガンだった。（別表2「初期の国内オルガン」参照）

披露演奏会は献堂式記念行事の一環として昭和二九（一九五四）年八月三日から二夜連続で行われた。第一夜は「古典オルガン音楽の夕」、第二夜は「現代オルガン音楽の夕」である。演奏者は広島市木挽町（現在の中区中島町）出身で日本のオルガン界の草分けとして知られる木岡英三郎（二八九五〜一九八二）であった。⁽²⁵⁾

八月六日の献堂式当日には高松宮宣仁殿下、同妃殿下御臨席の下、山上雅庸（一九二二〜二〇〇二）が演奏し、荘厳な音が聖堂に溢れんばかりの人々に披露された。⁽²⁶⁾

ンは昭和四八（一九七三）年の改修工事でパイプ数が三、三五五本となり⁽²⁸⁾（写真7）、従来の鍵盤台は残されたが三段の鍵盤台⁽²⁹⁾（写真8）が追加、音栓（ストップ）も四〇に改造され、さらに新しい鍵盤台ではメカニズムが従来の電気式ではなく機械式に変更された。パイプ群が信者席にやや近い位置に移され、相当数の旧パイプ撤去や組替えが行われたため、ケンプが演奏した当時の響きはもはや再現できなくなっている。その点でも当時の音を記録したこのレコードは貴重である。

ケルン市から贈られたオルガンを建造したのは、ボン市で代々続いたオルガンビルダー、ヨハネス・クライス社のヘルマン・クライス。⁽³⁰⁾ 昭和四八（一九七三）年の修復・改造を請けたのは、ルクセンブルグのオルガンビルダー、ゲオルク・ヴェステンフェルダーである。

五 平和の鐘

鉄は人間の使い方次第で戦争の道具にも平和を呼びかける鐘にもなり得る。ルール工業地帯の中心都市ボーフム市にある製鋼会社ボフメル・フェライン社は第二次世界大戦中、砲弾や砲身を製造する兵器工場であったが、平和への誓

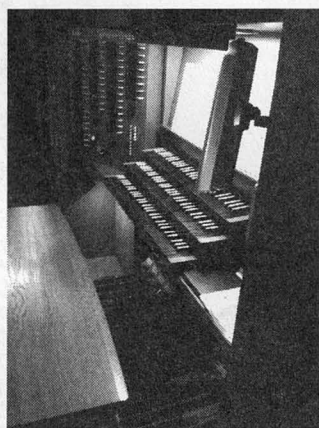


写真8 追加された3段の鍵盤台

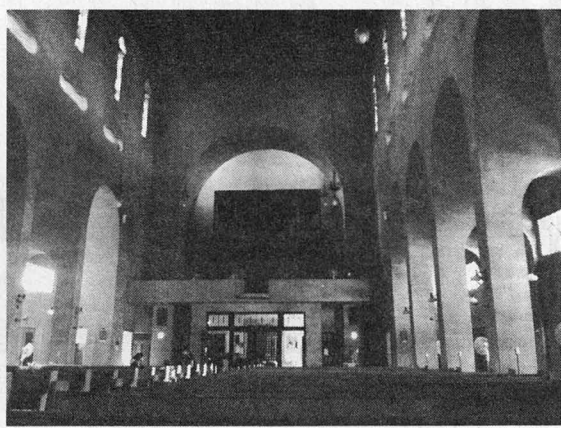


写真7 改修後のオルガン（正面後方の真ん中）

いを込めて世界平和記念聖堂のために四つの平和の鐘（別表3「塔鐘の概要」参照）を鑄造した。ポフメル・フェライン社の工場内で昭和二七（一九五二）年十月三十一日に行われた贈



写真9 ドイツで行われた鐘の贈呈式
(宗教法人カトリック広島司教区提供)

呈式⁽³¹⁾は国民的大行事であつたという。⁽³²⁾（写真9）これらの鐘は昭和二八（一九五三）年一月二三日に神戸で陸揚げされ、広島駅には同年二月九日朝に到着し駅で保管となつた。⁽³³⁾

贈られたカトリック幟町教会側では昭和二八（一九五三）年二月十五日午前十時四十分から駅に関係者約五〇〇人が集い引取式が行われた。続いてリボンで飾られた四つの鐘を載せた二台のトラックが同日午前十一時からドイツで録音された鐘の音をラジオ・カーで再現しながら荒神町、稲荷橋、山口町（現在の銀山町、胡町、幟町の各一部）、世界平和記念聖堂のコースでパレードし、正午からは到着式が行われた。広島教区長荻原晃神父は「全世界の市民と共に手を携えて世界平和のため努力しよう」とあいさつ。お祈り、聖歌合唱などの後、午後二時過ぎに閉会した。⁽³⁴⁾

同年三月二十九日「枝の主日」⁽³⁵⁾には古式ゆかしい祝別式が行われた。式には西ドイツ代理公使ハインリッヒ・ノルテ博士、ベルギー大使夫人、地元から浜井信三広島市長、森戸辰男広島大学初代学長など約三〇〇名が参集。ノルテ博士は「この鐘を平和の道標として、ともに戦禍の痛手をこうむった日独両国民が相携えて世界平和のために努力したい」と祝辞で述べ、荻原教区長の手で鐘のスイッチが入られ四つの平和の鐘が厳かに鳴り渡り午後一時過ぎに閉会となつた。⁽³⁶⁾二月の新聞⁽³⁷⁾では世界平和記念聖堂への取付けはドイツ代表が行う予定と報じられているが、四月二二日に日本通運広島支店の無償サービスにより取り付けられた。⁽³⁸⁾

六 レコードに刻まれた録音内容

直径二五cmの黒い盤面に針を下ろすと、まず聴こえてくるのは世界平和記念聖堂の鐘の音である。約二分間、平和の鐘が高らかに打ち鳴らされる。これは、ケンプの希望により収録されたものだ。⁽³⁹⁾

次にオルガンコラール「主イエス・キリストよ、われ汝に呼ばわる（Ich ruf zu dir, Herr Jesu Christ）BWV六三九」（楽譜1）⁽⁴⁰⁾がゆっくりと演奏される。ノーベル平和賞受賞者でバッハ研究家でもあったアルベルト・シュヴァイツァー博士（一八七五〜一九六五）が「音楽史全体における最大の出来事のひとつ」と評した⁽⁴¹⁾「オルガン小曲集BWV五九九〜六四四」の中の一曲である。「コラール」とは、ルター派の教会で会衆によって歌われた賛美歌で、万人に受け入れ易い曲が多い。「オルガンコラール」は、こうした賛美歌の旋律を使って作曲したオルガン曲である。

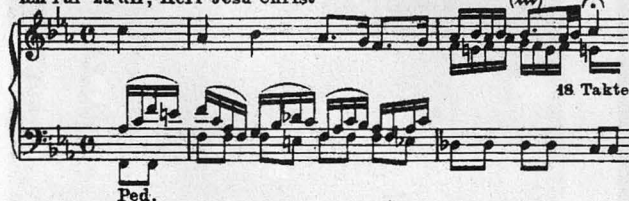
続いてケンプのスピーチが始まる。

波乱に富んだ今の時代ですが、広島の世界平和記念聖堂にオルガンが作られると知った瞬間ほど感動したことは稀でした。オルガンはよく「楽器の女王」と呼ばれます。確かに女王には違いありませんが、目には見えない「平和の王冠」をかぶった女王です。先祖代々そうしてきたように私もオルガンの前に座ると、いつも何か神聖なものを感じて身が引き締まるのもそのためです。

広島オルガンは特別なオルガンです。昭和二〇（一九四五）年まで、美しい瀬戸内海に面したごく普通の都市だった広島は、今日、全人類共通の願いを論を待たず明快に表す象徴になって

639

Ich ruf' zu dir, Herr Jesu Christ



楽譜1 主イエス・キリストよ、われ汝に呼ばわる（冒頭）
Used by kind permission of Breitkopf & Härtel, Wiesbaden, Germany.



楽譜2 我、心から待ち望む (冒頭)
Used by kind permission of Breitkopf & Härtel,
Wiesbaden, Germany.



楽譜3 いつの日か我去り逝くとき (冒頭)
Used by kind permission of Breitkopf & Härtel,
Wiesbaden, Germany.

ケンプが語り終えると、次にオルガンコラール「我、心から待ち望む (Herzlich tut mich verlangen) BWV 七二七」(楽譜2)⁽⁴³⁾が演奏される。レコードのジャケットにはオルガンコラール「いつの日か我去り逝くとき (Wenn ich einmal soll scheiden)」と、バッハの最高傑作「マタイ受難曲 BWV 二四四」の第六二曲 (楽譜3)⁽⁴⁴⁾の題名が記されている。この曲は、マタイ受難曲で題名

います。それは平和への願いです。広島と長崎に落ちた黙示録さながらの閃光は、人類の現状を我々に突きつけたと言えます。ヨハネ黙示録には、既にこうした悲惨な光景が描かれています。まさに地獄で、これを音楽的に表すと「短調」ですが、これに対して存在するのが、天国のように純粋な「長調」です。つまり、偉大な教会人⁽⁴²⁾いわく「五人目の福音史家」ヨハン・セバスティアン・バッハの世界です。この福音史家の説法に人間の言語は一切使われませんが、世界中の人々が理解できます。平和の鐘が鳴りやんだとき、この広島の平和記念聖堂の平和のオルガンで演奏できることはまさに神の思召し、幸運だと思います。そして、信仰の告白とお祈りとして「我らに平和を与えたまえ (Dona nobis pacem)」という言葉が胸に、平和のために戦っている人たちの仲間入りをすることができて幸せです。世界中の教会・寺院が鐘を鳴り響かせて、この「永遠の平和 (pax aeterna)」への呼びかけにこたえてくれますように。

を変えて五箇所に使われ中心的な存在となつてゐる有名なコラールだ。これら二つの曲は和声付けが異なる別の曲であるが、主題の旋律は共通となつてゐる。いずれにせよ、非常に印象深い旋律だ。

B面には「パッサカリアとフーガハ短調 (Passacaglia und Fuge c-moll) BWV 五八二」(楽譜4)⁽⁴⁵⁾が収録されている。ペダル鍵盤による低音主題から展開される壮大な変奏曲とフーガで、数学的とも例えることができる構造的秩序を持ち、⁽⁴⁶⁾緻密に書かれた力強い作品だ。

いずれも地味な演奏だが、一音一音、平和への願いを込めて折るがごとく丁寧に弾かれ、滋味あふれるものである。

七 巨匠、陰の猛練習

昭和二九(一九五四)年秋、戦後初のケンプの来日に際し、ケンプ夫妻を出迎えに胸を躍らせて広島から上京した男がいた。市内で楽器店を営んでいた中山良一である。ケンプは言った。「この度、NHKに招かれて参りましたが、一番の喜びは広島の世界平和記念聖堂に新しく据えられたオルガンが弾けることと、宮島の素晴らしい景色を心ゆくまで眺められることです。」中山はこれ聞いて、朝晩心ゆくまで宮島の全景を満喫してもらうべく心を込めたおもてなしをするために、対岸の割烹旅館「二茶苑」⁽⁴⁷⁾の二室とピアノを手配した。

後年、中山に「私に無言のうちに一生を通じてのよき反省を促されました」と言わせたのは、ケンプの練習ぶりだった。毎晩真夜中過ぎまで、楽譜を厳しく見つめての猛練習である。練習中は夫人ですら入室厳禁。世界平和記念聖堂

582 Passacaglia c-moll

Besetzung. Orgel oder Cembalo.

BGA XV, 289. — EZ Weimar etwa 1716/17 (oder erst in Köthen?). Die ersten vier Takte hat Bach einer kleinen Passacaglia von André Raison (um 1700) entnommen.



楽譜4 パッサカリアとフーガ ハ短調 (冒頭)
Used by kind permission of Breitkopf & Härtel, Wiesbaden, Germany.

でオルガンに臨んだときも全く同様だったという。⁽⁴⁸⁾ ケンプの素晴らしい演奏は、実は、気が遠くなるような猛練習の賜物だったのである。

八 もう一つの演奏会

録音のためのオルガン演奏の前日、昭和二九（一九五四）年十一月十四日、広島でピアノ演奏会が開かれた。演奏会場は幟町にあったザビエル記念館で、当時は木造のホールだった。現在はエリザベト音楽大学のセシリアホールという立派なホールに建て替わっている。そこで、ケンプのピアノ演奏が戦後初めて広島市民に披露された。ピアノソナタ「月光」や「ワルトシュタイン」などベートベンの名曲が市民を酔わせたのである。このときのプログラムは印刷が間に合わなかったのか、経費を節約したのか、理由は定かではないが配布されなかったという。⁽⁴⁹⁾

ケンプのこの時の来日コンサートは全国で三〇回にも及んだが、そのためにピアノリストの井口基成（一九〇八―一九八三）が国産の特に優秀なピアノ三台を選んだ。この中の一台で広島市内でのコンサートで使用されたのが当時価値



写真10 袋町小学校に残るケンプが弾いたピアノ

一五〇万円の日本楽器製造製ヤマハコンサートグランドピアノである。広島での演奏記念としてケンプの署名が入れたこのピアノは、平和記念公園内に建設中だった広島市公会堂⁽⁵⁰⁾（昭和六一（一九八六）年解体。跡地は現在、広島国際会議場）にと、中山が経営する楽器店から広島市に寄贈された。⁽⁵¹⁾

このときケンプが広島で署名したピアノ（写真10）は、関係者からの聴き取りにより、広島市公会堂の取壊しに当たり広島市立袋町小学校に移されていたことがわかった。ケン

プの署名は痕跡すら残っていないが、製造番号六六四〇〇から寄贈を受けた年と同じ昭和二九（一九五四）年製であることが製造元の日本楽器製造（現ヤマハ）で確認できた。署名が残されていない点を疑問に思い、広島市在住で国内では現役最高齢のピアノ調律師柴田寛榮氏⁽⁵²⁾に御意見を伺ってみたが、氏がお持ちの歴史的ピアノ⁽⁵³⁾の場合も修復の際に不本意ながら名演奏家の署名が消されてしまったそうである。⁽⁵⁴⁾

調査の過程でケンプの署名入りピアノが他都市に残されていることも判明した。平和大橋と西平和大橋の高欄の設計で知られる彫刻家イサム・ノグチ（一九〇四―一九八八）。その彼が晩年に設計した札幌市内のモエレ沼公園。その公園でケンプの署名入りピアノを見たという情報を得た。本市との関連はなく、札幌の多米楽器商會が昭和五四（一九七九）年のケンプ来日時に練習用にと用意した日本楽器製造製のもので、二年後の昭和五六（一九八一）年に札幌市が同楽器店から寄贈を受けていた。⁽⁵⁵⁾

九 被爆者に捧げる

世界平和記念聖堂でのオルガン演奏は、ピアノコンサートの翌日の昭和二九（一九五四）年十一月十五日朝、NHKが録音した。写真11は、ケンプの自筆でこのとき演奏した曲名「Bach: Passacaglia & Fuge」、その主題の楽譜並びに場所及び日付けを示す文字「Hiroshima, 15 XI '54」を記したものである。ケンプが後に日本のファンに贈ったブロマイドの裏に書かれていたものだ。自筆の楽譜にみられる筆跡は音楽を慈しむかのように美しく、どことなくJ. S. バッハの自筆楽譜に似ている。

ケンプは、NHKからの謝礼金を原爆の被災者のために使ってほしいと、広島市分

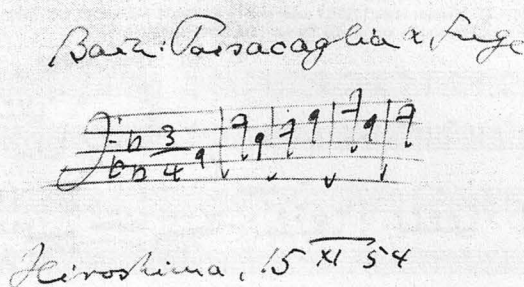


写真11 ケンプの肉筆（松本ユリコ氏提供）

十万円、長崎市分八万円を浜井信三広島市長に託し、カトリック幟町教会に対しても二万円を寄付した。⁽⁶⁶⁾ 官製はがきが一枚五円、広島電鉄の路面電車の運賃が十三円だった時代である。現在よりも一桁物価が安かった。

この録音は、三日後の十一月十八日午後九時十五分から二五五分間、NHKラジオオ第一放送で全国に流された。⁽⁶⁷⁾ そして、大みそかの夜には、十五分間NHK海外向け短波放送の電波に乗せられ、広島市の平和の鐘とオルガンが世界中に響き渡った。⁽⁶⁸⁾

その後、昭和三一（一九五六）年にレコードとして発売されたが、ケンプはそのレコードの売り上げを被爆者のために全額寄付している。昭和三三（一九五八）年七月二日、日本赤十字社本社で広島市の原爆被災者に対する寄付金の贈呈式が行われた。「広島市の犠牲者のために有効に使って下さい」と、ケンプに代わってガリンスキー・ドイツ連邦共和国臨時代理大使が、小切手三、四二八円（約二九万五、〇〇〇円）とケンプのレコードを島津忠承日赤社長に手渡した。⁽⁵⁹⁾ 島津自身、戦後、国交が断絶していた旧ソビエト連邦と中華人民共和国に取り残された旧日本兵の帰還に腐心した人物である。戦争犠牲者救済の同志として、ケンプにきつと共感しただろう。寄付金はケンプの得た印税に、ケンプが契約を結んでいたドイツと日本のレコード会社が売上げの利益を加えたもので、その後もこの寄付は続けられ、昭和三九（一九六四）年十二月九日までの十二回の寄付で、総額六三万五、六八三円になった。⁽⁶⁰⁾

そのほか、戦後初の来広のとき、楽屋を訪れた似島の原爆孤児たちに歓待されたことを忘れることができなかったケンプは、市内の児童施設に定期的に送金して児童らを慰めたという。そして、昭和四二（一九六七）年十一月二五日のピアノ演奏会の後、「市内の児童施設にいる子供たちのために使ってほしい」と、山田節男広島市長に現金三〇万円を贈っている。⁽⁶¹⁾ これに対し山田市長からは世界平和への扉を開く銀の鍵が手渡された。⁽⁶²⁾

十 ケンプとオルガンとの再会

ピアノ演奏会が広島で開かれた昭和四二（一九六七）年十一月二五日、ケンプは七二歳の誕生日を迎えた。「広島へ行ったら、もう一度、是非、世界平和記

念聖堂のオルガンを弾きたい」という念願がこの日かなえられたのである。

広島市公会堂でのピアノ演奏を終え、夫人、令嬢を伴ったケンプは、午後九時過ぎ、世界平和記念聖堂でエリザベト音楽大学の生徒やファンら約三〇〇人の出迎えを受けた。ゴースス・エリザベト音楽大学学長の案内で聖堂内を懐かしそうに見て回った後、オルガンの鍵盤台に向かい、世界平和への願いを込めてバッハの作品をおよそ十分間演奏した。

曲目は不明だが、バッハの受難曲を演奏したとのことなので、「マタイ受難曲 BWV二四四」の第六二曲「いつの日か我去り逝くとき（Wenn ich einmal soll scheiden）」と主題の旋律を同じくするオルガンコラール「我、心から待ち望む（Herzlich tut mich verlangen）BWV七二七」を演奏した可能性がある。当時の新聞⁽⁶³⁾に掲載された演奏中の写真（写真12）は、本番前の試し弾きのとき撮影されたものかもしれないが、譜面がないことから察すると、バッハの受難曲をもとに即興で演奏した可能性も否定できない。

演奏を実際に聴いた人々の記憶をたどるにも四五年以上もの時間の隔たりが、それを困難にしていた。ある人の記憶では、「具体的に何が演奏されたのか思い出せないが、寒くて暗い聖堂内に、静かに、静かに、ゆっくり、ゆっくり、『音色』が降ってきたようだった」という。写真に残されたオルガンのストップの設定

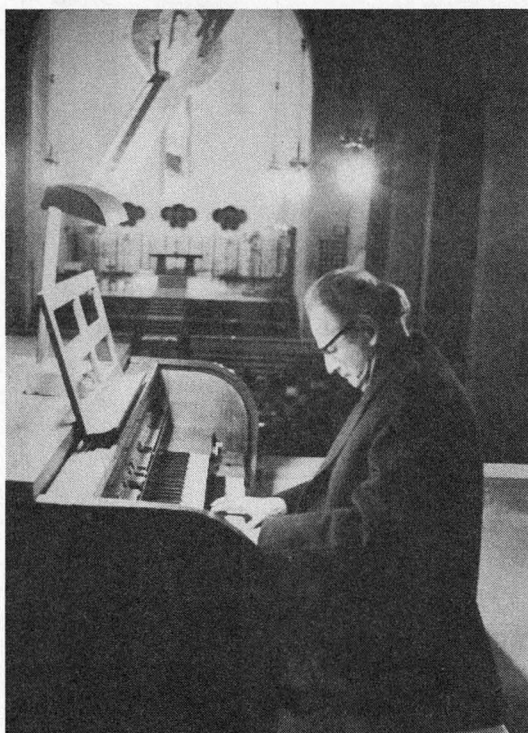


写真 12 世界平和への願いを込めて静かに演奏する
ヴィルヘルム・ケンプ
(昭和 42 年 11 月 27 日付け中国新聞朝刊 15 面掲
載記事より、中国新聞社提供)

がピアノニッシモになっていること、また、写真の見出しが「世界平和への願いをこめて静かに演奏するウィルヘルム・ケンプ氏」となっていることから、的を得た印象だと思う。「五人目の福音史家」ヨハン・セバステイアン・バッハの音楽によるケンプの祈りが静かに捧げられたに違いない。

十一 結び

エリザベト音楽大学を退職し、現在は故郷・札幌で暮らす山崎陽子氏は、ラジオで世界平和記念聖堂でのケンプの演奏を聴いて感動し、広島で学び、生涯の仕事としてオルガニストを志した。さらに、パリで研鑽を積んで、オルガン科の教壇に立たれたという。たった一度の音楽放送が人生を変えた。それだけの力を持った演奏だったと言えるだろう。

この聖堂では昭和四四（一九六九）年六月以降、原則として毎月第一日曜日の午後四時から市民向けのオルガン定期演奏会が開催され、平成二五（二〇一三）年三月三日で四四三回目を迎えた。

ドイツ生まれのケンプは、米国での初公演を昭和三五（一九六四）年になってやっとニューヨークのカーネギーホールで実現した。しかし、日本では早くも昭和十一（一九三六）年四月七日、東京市永田町のドイツ大使館で初公演をし、⁽⁶⁴⁾以来、昭和五四（一九七九）年春までに十回も来日した⁽⁶⁵⁾という稀に見る親日家だった。とはいえ、これほど広島と関わっていたとは驚きである。彼の録音活動の後半でしばしば使用していたベートーベンザールというホールは広島の姉妹都市ハノーバーにある。第二次世界大戦で市街地の大半を失い、広島と同じく戦後一貫して平和を希求してきたまちである。ケンプも広島市と交流のあるドイツのこの美しい平和のまちで仕事をしていたのかと思うと、不思議な絆を感じる。

広島市では被爆体験の継承に向けた本格的な取組が始まっているが、ケンプが心を込めて被爆地ヒロシマに贈った音楽の捧げものについても語り継いでいかねばと思い「国際平和文化都市」を都市像として掲げる広島市の職員としての役割を意識しながら執筆した。執筆に当たっては世界平和記念聖堂の献堂式でオルガンを演奏した山上雅庸の長女でオルガニストの山上はる「エスピナス氏（フランス在住）」をはじめ多くの皆様から貴重な情報を頂戴した。写真はド

イツ・グラモフォン社のものをユニバーサルミュージックから、また、世界平和記念聖堂で撮影したものを宗教法人カトリック広島司教区及び中国新聞社から御提供いただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

参考文献

- (1) "Kempff, Wilhelm." *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed. 2001. Print.
- (2) 小林義武、『バッハとの対話 バッハ研究の最前線』、小学館、平成十四年
- (3) 世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会編、『世界平和記念聖堂（広島）献堂50周年記念誌』、カトリック広島司教区発行、平成十七年

区 分	ストップ名	備 考
主鍵盤 (I) (ストップ数：9)	Quintadena 16' Principal 8' Stillgedackt 8' Octav 4' Spitzflöte 4' Nasard 2 2/3' Rauschpfeife II Mixtur IV-V Trompete 8'	現在「Spitzflöte」のシールでストップ名の文字が隠れている。 同じく「Schweitzerpfeife」のシールで隠れている。 同じく「Sesquialtera」のシールで隠れている。 同じく「Schwegel」のシールで隠れている。
ポジティブ鍵盤 (II) (ストップ数：9)	Rohrflöte 8' Salicional 8' Principal 4' Blockflöte 4' Schwegel 2' Sifflöte 1 1/3' Sesquialtera II Scharff IV Krummhorn 8'	同じく「Hohlflöte」のシールで隠れている。 同じく「Gambe」のシールで隠れている。 同じく「Schwebung 8」のシールで隠れている。 同じく「Doppelprincipal」のシールで隠れている。 同じく「Koppelflöte 4」のシールで隠れている。 同じく「Nasard 2 2/3」のシールで隠れている。 同じく「Blockflöte 2」のシールで隠れている。 同じく「Rohrschalmey」のシールで隠れている。
ペダル鍵盤 (P) (ストップ数：7)	Subbass 16' Zartbass 16' Principalbass 8' Gedacktbass 8' cb Choralbass 4' cb Flachflöte 2' cb Posaune 16'	同じく「Flöte」のシールで隠れている。 同じく「Sub」のシールで「Zart」の文字が隠れている。 現在「Rohr」のシールがストップ名が隠れないように上に貼り付けられ、「Rohr Gedacktbass 8」の表示となっている。 現在「Pommer」のシールでストップ名の文字が隠れている。 ※「cb」はエクステンション（低音部は共用パイプ使用）
カプラー		II-I ポジティブ鍵盤を主鍵盤に連結 (両鍵盤のストップの音を主鍵盤で演奏) I-P 主鍵盤をペダル鍵盤に連結 (両鍵盤のストップの音をペダル鍵盤で演奏) II-P ポジティブ鍵盤をペダル鍵盤に連結 (両鍵盤のストップの音をペダル鍵盤で演奏)

註・ストップ、カプラーのほか、演奏補助装置あり。

- ・備考欄に現在の旧鍵盤台にあるストップ・スイッチの外観を記している。
- ・旧鍵盤台は改修の際にストップ・スイッチは機能するよう残されたが、オルガン本体に大幅な改修が行われたため、ストップ名変更の有無にかかわらず、新たに構成されたオルガンを操作するものとなった。

別表2 「初期の国内オルガン」⁽⁶⁷⁾

製作年	所在地	施設名称	原産国	ストップ数	パイプ数	備 考
明治7/8年	横浜市 中区	クライストチャーチ				関東大震災で焼失
	横浜市 中区	横浜ユニオン・チャーチ				
	横浜市 中区	横浜天主堂				
	東京都 中央区	聖三一教会				
	東京都 文京区	本郷中央会堂				
明治16年	東京都 中央区	聖三一教会	米	5 (13)	233	明治40年聖マリア教会(京都市 左京区)へ移設
大正4年頃	東京都 千代田区	暁星中学聖堂	仏		135	
大正7/8年 (大正10年頃)	東京都 豊島区	立教大学諸聖徒礼拝堂	米	8 (13)	445 (378)	
大正9年	東京都 港区	南葵楽堂	英	26 (33)	(1,384)	関東大震災後、昭和3年に上野 の東京音楽学校奏楽堂に移設
大正13年頃	神戸市 中央区	神戸ユニオン教会	独	8	100	
(昭和元年頃)	神戸市 中央区	(聖公会)	(英)			
昭和4年 (昭和3年)	東京都 千代田区	東郷坂独逸教会	独	6 (11)	394	戦災で焼失
昭和4年	東京都 港区	東京聖三一教会	加	17	1,000	戦災で焼失
	新潟市 中央区	カトリック新潟教会	独	8	276	
昭和5年	東京都 渋谷区	青山ユニオン教会	独	18	633	戦災で焼失
	東京都 中央区	三越本店	米	13 (27)	791 (1,640)	
昭和6年	横浜市 中区	クライストチャーチ	米	21	337	戦災で焼失
	東京都 杉並区	(旧)立教高等女学校 聖マーガレット礼拝堂	米	19 (17)	768 (997)	
	東京都 町田市	玉川学園 講堂	米	(19)	(750)	
昭和7年	仙台市 青葉区	東北学院 ラーハウザー記念礼拝堂	米	24 (35)	約1,000 (864)	
	東京都 渋谷区	青山学院礼拝堂	独	11	579	
	東京都 文京区	聖テモテ教会	日	8	459	戦災で焼失
昭和9年	東京都 文京区	上野音楽学校 練習室	日	8	622	
昭和10年	東京都 練馬区	東京公教大神学校	日	5	256	戦災で焼失
昭和16年	京都市 上京区	同志社女子大学 栄光館ファウラーチャペル	米	26	1,342	
昭和22年	岐阜県 多治見市	多治見修道院	米	23	1,200	
昭和28年	広島市 中区	エリザベト音楽短期大 学	独	20		広島初のオルガン。ベルギーか ら寄贈 ⁽⁶⁸⁾
	広島市 中区	世界平和記念聖堂	独	25	1,767	

註・所在地名は現在のものである。括弧内は日本楽器製造発行の小冊子⁽⁶⁹⁾による。

- ・原産国の「米」、「英」、「独」、「仏」、「加」、「日」は、それぞれ「アメリカ」、「イギリス」、「ドイツ」、「フランス」、「カナダ」及び「日本」を表す。

別表3 「塔鐘の概要」⁽⁷⁰⁾

区分	調子	直径(m)	重量(総)	名称
(A)	嬰二	一・四二五	一、一一五	平和の元后
(B)	嬰へ	一・一八〇	六五〇	聖フランシスコ・ザビエル
(C)	嬰ト	一・〇四五	四五〇	聖ペトロ・カニシウス
(D)	ロ	〇・八七〇	二五〇	聖パウロ・三木

註

- (1) 我が国で一般に「オルガン」と呼ばれている楽器は、正確には「リード・オルガン」と称すべきもので、欧米で「オルガン」と呼ばれているのは、パイプオルガンである。
- (2) 三好史久、『中国新聞』、「緑地帯・音楽の捧げもの」、平成二十四年十一月二三日付け十二面、同月二四日付け七面、同月二七日付け十一面、同月二八日付け十四面、同月二九日付け十三面、同月三〇日付け十一面、同年十二月一日付け十二面及び同月四日付け十二面
- (3) 『中国新聞』、昭和十一年四月二日付け七面、「世界的ピアニスト、ケンプ氏来朝」
- (4) 寛潤二、『音楽の友』一九六一年十二月号、六一頁、「ケンプのベートーベンチクルス、三、ケンプのおいたち」／ケンプの自叙伝(ヴァイルヘルム・ケンプ、『鳴り響く星のもとに ヴァイルヘルム・ケンプ青春回想録』二二―二三頁、土田修代訳、白水社、昭和五十六年)の中には、ケンプが父と楽譜を見ていたとき、父から「ここにある全部を誰が考え出したか、知っているかい?」と尋ねられたとき、神様だと父は言うのだろう、そうケンプは思った。しかし父は「ベートーヴェン」と言ったというエピソードが書かれている。
- (5) 遠山一行・海老沢敏編、『ラルース世界音楽事典』上、六〇七頁、福武書店、平成元年
- (6) ユー・ローゼン「HIROSHIMA Orgelkonzert aus der Weltfriedenskirche mit Werken von Johann Sebastian Bach (Deutsche Grammophon Gesellschaft LPE 17069)」のジャケット裏面の解説参照

- (7) 『中国新聞』、昭和二十九年十一月十五日付け七面、「ぜひ弾きたい広島オルガン、ケンプ氏来朝」。この記事では「ドイツでオルガンは「楽器の王」「平和の王」と和訳されているが、「ドイツでオルガンは「楽器の女王」「平和の女王」の誤訳であると考えられる。レコードに残されたケンプのスピーチでも「楽器の女王」と述べていることが確認できる。因みにドイツ語では、オルガンは女性名詞である。／同、昭和二十九年十一月十八日付け夕刊二面、「平和の調べ」
- (8) 『中国新聞』、昭和二十九年十一月十八日付け夕刊二面、「平和の調べ」
- (9) エリザベト音楽大学、『エリザベト音楽大学創立五〇周年記念誌』四一頁、平成十年
- (10) 『中国新聞』、昭和二十六年三月十三日付け三面、「広島記念聖堂の後援会設立総会」
- (11) 『中国新聞』、昭和二十五年九月二六日付け二面、「広島に壮大な平和教会、世界各国から浄財、来月着工・原爆体験の神父が発起」／同、昭和二十六年八月二日付け四、「二十七万円の浄財、平和記念堂建設に寄付」／同、昭和二十九年七月二日付け七面、「8月6日期し完工式、国際色も豊かに平和聖堂」／同、昭和二十九年七月二四日付け七面、「広島平和記念聖堂名称改称」／『CONSECRATION OF THE MEMORIAL CATHEDRAL FOR WORLD PEACE 世界平和記念聖堂献堂式記念プログラム』六頁、昭和二十九年八月
- (12) 新聞記事によると建築費八千万円、うち海外からは六千万円である。『中国新聞』、昭和二十九年七月二四日付け七面、「広島平和記念聖堂名称改称」／石丸紀興氏の著書『世界平和記念聖堂』(相模書房、昭和六三年)の二一九頁には海外から約六千万円とあるが、一四一頁では約四千万円と結論付けている。
- (13) 石丸紀興氏によると国内からは三、八〇二万、二九五円である。(前掲『世界平和記念聖堂』一四〇頁)一方、新聞記事によると建築費八千万円、うち国内からは二千万円である。(『中国新聞』、昭和二十九年七月二四日付け七面、「広島平和記念聖堂名称改称」)これらの金額は一致しないが、取材後も寄付があつたと考えられる。
- (14) 昭和五十八年七月十七日の講演会でフーゴ・ラサール神父は多額の寄付を行った米国人が「ブライドリー」であつたと述べている。(『建築家村野藤吾さんと世界平和記念聖堂を語る会』実行委員会代表幹事小林正典編集・発行、『世界平和記念聖堂の建築をめぐる講演と対談』五―八頁、昭和五十九年)／後日談として同神父は、米国の実業家トーマス・A・ブラッドレーが一人で五万ドルの寄付を申し出したことを明かしている。(石丸紀興、前掲『世界平和記念聖堂』一三八頁)
- (15) 『中国新聞』(昭和二十九年七月二四日付け七面、「広島平和記念聖堂名称改称」)による。石丸紀興氏(前掲『世界平和記念聖堂』一八一頁)によるとオルガンを寄贈したケルン市の予算は「二万七千マルク(約三千万円)」である。
- (16) 前掲『世界平和記念聖堂』二二三頁によると、厳密には、「設計代を初め頃一ぺんだけ差し上げましたが、その後は村野先生がいつも断りました(愛宮神父による談)」ということであるが、その額はわずかであつたらしい。／前掲『世界平和記念聖堂』

の建築をめぐる 講演と対談』十三～十六頁

- (17) 『中国新聞』昭和二十七年九月二六日付け五面、「独・伯が異常の好意、欧米講演行脚の萩原神父帰る」

- (18) 『中国新聞』昭和二十八年二月十日付け六面、「西独ボンで贈呈式、広島へ来るパイプ・オルガン」／『朝日新聞』昭和二十八年二月九日付け七面、「広島へオルガン、西独ケルン市から」

- (19) 'Hiroshima Gets German Organ.' *New York Times* 9 February 1953. Print.

- (20) 『中国新聞』昭和二十八年二月十二日付け五面、「無駄にするな犠牲者の死「平和のオルガン」で米紙論調」(昭和二十八年二月十日付けニューヨーク・タイムズ紙の論説 (AN ORGAN FOR HIROSHIMA) を紹介)

- (21) 吉田實監修、『日本のオルガン』一八六頁、日本オルガニスト協会発行、昭和六〇年

- (22) 吉田實監修、前掲『日本のオルガン』一八七頁／前掲『CONSECRATION OF THE MEMORIAL CATHEDRAL FOR WORLD PEACE 世界平和記念聖堂献堂式記念プログラム』八頁にはパイプ数一、八五四、内発音するもの一、八〇七、装飾用四七とある。

- (23) 『中国新聞』昭和二十九年五月十一日付け八面、「日本一のパイプオルガン、記念聖堂に取付け始る」

- (24) 『中国新聞』昭和二十九年七月二二日付け七面、「8月6日期し完工式、国際色も豊かに平和聖堂」／同、昭和二十九年七月二四日付け七面、「広島平和記念聖堂名称改称」／同、昭和二十九年十一月十四日付け八面、「特別演奏謝礼を孤児へ、ケンプ氏きょう来広」

- (25) 前掲『CONSECRATION OF THE MEMORIAL CATHEDRAL FOR WORLD PEACE 世界平和記念聖堂献堂式記念プログラム』二頁

- (26) 『中国新聞』昭和二十九年八月七日付け七面、「人類の祈り一つに結んで、各国の外交官も参列、平和記念聖堂の完工式」

- (27) Willmes, Gregor. *Wilhelm Kempff: The Solo Repertoire*. Trans. Stewart Spencer. Berlin: Deutsche Grammophone GmbH, 2012. 4. Print. 『バイエルン・ケンプー多才な音楽家の肖像』平成十七年(ユニバーサルミュージックPROA-20)のCD解説書には「ケンプ自身の言葉から、広島世界平和記念聖堂のパイプオルガン除幕式にて語る」と記されている。

- (28) 吉田實監修、前掲『日本のオルガン』一八七頁

- (29) 石丸紀典、前掲『世界平和記念聖堂』二二三頁には「鍵盤を二段から三段に増加させ」と記されているが、誤解が生じないように詳しく説明すると、ケルン市から贈られた電気式の鍵盤台には二段の手鍵盤とペダル鍵盤が備えられていたが、聖堂二階の合唱隊席に使用可能な状態で残された。そして、それに代わるメインの鍵盤台とし

て機械式で三段の手鍵盤とペダル鍵盤を備えたものが二階の壇上にあるオルガン本体に取り付けられたのであり、一つの鍵盤台が五段になっているのではない。

- (30) 『中国新聞』昭和二十八年二月十日付け六面、「西独ボンで贈呈式、広島へ来るパイプ・オルガン」

- (31) 『中国新聞』昭和二十七年十一月一日付け五面、「刻む日本文字、ヒロシマへ贈られる「平和の鐘」」／『朝日新聞』昭和二十七年十一月一日付け東京版夕刊一面「広島へ平和の鐘、西独の製鋼労働者から」

- (32) 平和の鐘の製造責任者の娘、ハンナ・ベアテ・ショップ・シリング女史の配偶者の証言(平成十七年十一月十三日)

- (33) 『中国新聞』昭和二十八年二月十一日付け五面、「西独から平和の鐘広島入り」

- (34) 『中国新聞』昭和二十八年二月十二日付け六面、「十五日に到着式「平和の鐘」式順を発表」／同、昭和二十八年二月十六日付け六面、「厳かに原爆の街進む、きのう「平和の鐘」到着式」

- (35) キリスト教で昭和二十八年の復活祭(四月五日)の一週間前にあたる。

- (36) 『中国新聞』昭和二十八年三月三〇日付け八面、「鳴はじめた「四つの鐘」、広島平和記念聖堂で祝別式」

- (37) 『中国新聞』昭和二十八年二月十二日付け六面、「十五日に到着式「平和の鐘」式順を発表」

- (38) 『中国新聞』昭和二十八年四月二二日付け六面、「平和の鐘」を取付、復興の街へ響く日近し」

- (39) 『朝日新聞』昭和二十九年十一月十五日付け広島版八面、「世界へ贈る「平和の調べ」大シンカに国際放送、平和聖堂パイプ・オルガン、ケンプ氏が演奏」

- (40) Schmieder, Wolfgang. *Thematisch-systematisches Verzeichnis der musikalischen Werke von Johann Sebastian Bach, Bach-Werke-Verzeichnis (BWV)*. 1958. Leipzig: VEB Breitkopf & Härtel, 1976. 446. Print.

- (41) Schweizer, Albert. *J.S.BACH, Vol. I*. 1911. Trans. Ernest Newman. New York: Dover, 1966. 284. Print. 角倉一朗『バハ』一五六頁「音楽之友社」昭和三十八年

- (42) ナータン・セーデルブロム(Nathan Soderblom 一八六六―一九三二)のこと。スウェーデンの宗教史学者で教会政治家。一九三〇年ノーベル平和賞受賞。(ウィルヘルム・ケンプ、前掲『鳴り響く星のもとに、ヴィルヘルム・ケンプ青春回想録』三四九頁、三四四頁)／この教会人をアルベルト・シュヴァイツァーとする説は根拠不明。

- (43) Schmieder, Wolfgang. *Thematisch-systematisches Verzeichnis der musikalischen Werke von Johann Sebastian Bach, Bach-Werke-Verzeichnis (BWV)*. 1958. Leipzig:

VEB Breitkopf & Härtel, 1976. 459. Print.

(44) *Ibid.*, 340. このコラールは旧バッハ全集ではマタイ受難曲の第七二曲であるが、今日一般的に用いられている新バッハ全集では第六二曲となっている。

(45) *Ibid.*, 434. シューマダーのバッハ作品総目録ではこの曲の題名は楽譜4のとおりに「パスサカリヤ ハ短調 (Passacaglia c-moll)」とされているが、ここでは「レコード・ジャケットに記された題名によった」。

(46) 角倉一朗、前掲『バッハ』一五六頁

(47) 一茶苑は、現在は廃業しているが、ケンプ来日と同じ年の二月に元ニューヨーク・ヤンキースの打撃王ジョー・デイマジオ選手（一九一四～一九九一）とハリウッド女優マリリン・モンロー（一九二六～一九六二）が新婚旅行の延長で原爆ドームや広島県総合グラウンド野球場を訪れたときに宿泊したことでも知られていた有名な旅館である。広島県総合グラウンド野球場は、当時、広島カープの本拠地。旧広島市民球場がオープンしたのは昭和三二年七月であった。（『中国新聞』、昭和二十九年二月十二日付け七面、「モンローもため息つく、原爆ドーム見物」／同、同日付け夕刊二面、「広島球場へは行くワ」デイマジオ夫妻広島入り）

(48) 『ベガ弦楽オーケストラ演奏会プログラム』、昭和四五年八月、裏表紙

(49) 当該ピアノ演奏会に行かれた細川浩史氏（広島市中区在住）の証言（平成二四年十一月二四日）

(50) 浜井信三、『原爆市長（復刻版）』二二一～二二三頁、シフトプロジェクト、平成二三年。広島市公会堂は地元財界からの寄付により三億四千万円余りの工費で建設され、広島市に寄贈された。

(51) 『中国新聞』、昭和二十九年十一月十六日付け七面、「ケンプ氏の広島演奏をめぐる二つの物語り、謝礼金を原爆被災者へ、公会堂に使用ピアノ寄贈」

(52) 柴田寛榮氏は昭和二年七月二日生まれ

(53) 昭和二十七年、東京の日比谷公会堂に日本で初めて導入された米国製のスタインウェイ・アンド・サンズ社製ピアノ

(54) 昭和三十七年度の中四国外科学会が広島市公会堂で開催されたとき、ピアノの蓋を開けてケンプの署名を見たという西田勝實氏（広島県呉市在住）の証言（平成二四年十二月八日）がある。署名が消されたのはそれ以降である。

(55) 『北海タイムス』、昭和五六年二月十五日付け十四面、「豊平館にまた文化遺産、ケンプのサイン入りピアノ」。このピアノは現在、豊平館改修中のため、暫定的にモエレ沼公園にあるガラスのピラミッド内に置かれているが、いずれ豊平館（札幌市中央区中島公園内）に戻される。

(56) (51)と同じ

(57) 『中国新聞』、昭和二十九年十一月十八日付け四面、ラジオプログラム／『朝日新聞』、同日付け五面、ラジオプログラム

(58) 『朝日新聞』、昭和二十九年十一月十五日付け広島版八面、「世界へ贈る「平和の調べ」大ミソカに国際放送、平和聖堂パイプオルガン、ケンプ氏が演奏」／『中国新聞』、昭和二十九年十一月十六日付け七面、「ケンプ氏の広島演奏をめぐる二つの物語り、謝礼金を原爆被災者へ、公会堂に使用ピアノ寄贈」／同、昭和二十九年十一月十八日付け夕刊一面、「平和の調べ」

(59) 『中国新聞』、昭和三十三年七月二日付け夕刊三面、「レコード益金を寄付、W・ケンプ氏、広島原爆被災者に」

(60) 日本赤十字社総務局組織推進部指導課で確認

(61) 『中国新聞』、昭和四二年十一月二六日付け九面、「施設の子へ三〇万円、ピアノストのケンプ氏」／『朝日新聞』、昭和四二年十一月二六日付け広島版十六面、「児童福祉にと三十万円贈る、ケンプさん広島市へ」

(62) 『中国新聞』、昭和四二年十一月二七日付け十五面、「も一度あのオルガンひきたい、平和記念聖堂、広島入りのケンプ氏、世界平和願ってバッハの受難曲、なつかしむ十三年前」

(63) (62)と同じ

(64) 『東京朝日新聞』、昭和十一年四月八日付け十一面、「純粹ナチス芸術、ケンプ教授の初演奏」

(65) 昭和十一年春、昭和二十九年秋、昭和三十六年秋、昭和四〇年春、昭和四二年秋、昭和四五年春、昭和四七年秋、昭和四九年秋、昭和五二年秋及び昭和五四年春に來日している。そのうち広島で演奏会を開催した日は特定できたのは昭和十一年五月二日（予定）（『音楽世界』昭和十一年四月号、二〇頁、音楽世界発行所／『音楽新潮』昭和十一年四月号、八六頁、十字屋楽器店内音楽新潮発行所）、昭和二十九年十一月十四日、同月十五日（非公開）、昭和四二年十一月二五日（前掲『エリザベト音楽大学創立五〇周年記念誌』四一頁）及び昭和四七年十一月六日（『音楽の友』一九七二年十月号、七三頁、音楽之友社）である。

(66) クライス社から入手した資料による

(67) 吉田實監修、前掲『日本のオルガン』及び同氏監修『日本のオルガンⅡ』（日本オルガニスト協会発行、平成四年）を基に作表

(68) 山上雅庸、『中国新聞』、昭和二八年三月三〇日付け五面、「パイプオルガンの歴史と構造、エリザベト音楽短大へ贈られた、動力でパイプへ送風、最大のものはパイプが一万五千本、三世紀頃から教会で使う」

(69) 『パイプオルガンに就て』、日本楽器製造発行（非売品）、昭和七年

(70) 前掲『CONSECRATION OF THE MEMORIAL CATHEDRAL FOR WORLD PEACE 世界平和記念聖堂献堂式記念プログラム』八頁